

# 心理専門職による心の健康に関する知識・知見の 社会的普及に関する探索的検討

The inclination for public dissemination of psychological knowledge  
on mental health promotion among clinical psychologists  
and clinical psychology graduate students

新井 雅  
跡見学園女子大学  
Masaru Arai  
Atomi University

## 要 約

本研究では、日本の心理専門職と大学院生を対象に、心の健康に関わる知識・知見を多様な人々に伝達・普及する諸活動への態度(社会的普及志向)の実態と関連要因を探索的に検討することを目的とした。Web 調査により、公認心理師養成大学院や臨床心理士指定大学院(修士課程・博士前期課程)の大学院生70名、臨床心理士等の心理専門職102名、計172名から有効回答を得た。その結果、心理専門職・大学院生共に、日々の臨床実践に関わる機会が多い対象者(例：患者・クライアントや児童生徒)や、普及の場として従来より実践されてきた方法(例：講演・研修会、学校教育)には、前向きな社会的普及志向を示していた一方で、抵抗感を有している普及対象や方法もみられた(例：行政・政策担当者、テレビ・ラジオ、Web サイト・SNS)。また、心理専門職・大学院生ごとに違いはみられたものの、研究活動に関わる興味・関心や自信、大学院における研究の教育訓練環境や研究経験、エビデンスに基づく臨床実践への態度等が、社会的普及志向と直接的または間接的に肯定的な関連を示すことが明らかとなった。最後に、心の健康に関わる知識・知見の社会的普及志向を醸成し得る心理専門職の養成・教育訓練のあり方と共に、社会的普及の効果的な実践方法について詳細に検討を進めていく必要性について考察した。

【Key Words】心理専門職、科学者-実践家モデル、心理学的知識の社会的普及、研究活動、エビデンスに基づく心理学的実践

## I 問題と目的

臨床実践に関心の強い心理専門職において、研究活動を専門性の1つとしてどのように位置づけるかを再考することは重要である。科学者-実践家モデルでは、研究活

動に携わり新たな知見を生成する活動のほか、実証研究を通して示された知識・知見に基づく実践活動(Evidence-Based Practice: EBP)が重視される(e.g., APA Presidential Task Force on Evidence-Based Practice, 2006)。さらに、実証研究

で生み出された心理学的知識や知見は、専門家や学術雑誌の中で共有されるばかりでなく、一般の人々や行政等に向けて伝達・普及することが重要となる(Sommer, 2006)。これらの議論を踏まえると、研究活動に関わる知識・技能・態度を基盤として、①研究知見の生成に直接的・間接的に関与し、②臨床実践において多様な研究知見を活用し、③社会に向けて研究知見を普及させることが、心理専門職による研究活動を基盤とした多様な専門的活動と捉えることができる(新井, 2019)。

特に、心理専門職による③に関わる諸活動への関与はこれまで十分であったとはいえない。また、2017年9月に施行された日本の公認心理師法においても「心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供を行うこと」が公認心理師に求められていることを踏まえると、心理専門職による③に関わる諸活動をどのように発展させていくのかを検討することは非常に重要である。

先行研究(e.g., Kaslow, 2015; 楠見, 2013; Wedding, 2017)を踏まえると、心理学的知識や知見を普及する対象は、心理学内の専門家同士のみならず、他職種や政策担当者、一般の人々(患者・クライアント、小学生～大学生も含む)など様々である。普及方法や媒体も多様で、学術雑誌、書籍、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、WebサイトやSNS、学校教育、博物館等があげられる。多様な媒体・方法を用いて社会の人々とつながる機会が増えている現代だからこそ、心理専門職は心の健康に関わる知識の普及を通して、人々が抱える心の問題の予防や、より良い社会政策に向けた示

唆・提言、これからの心理専門職と社会・人々との新たなコミュニケーションのかたちの創造に、どのように貢献できるかが問われていると考えられる。

一方、心理学の知識や知見が誤解されて人々に広まってしまうのではないか、わかりやすく面白い情報のみが人々に伝わりやすいのではないかなどといった心理専門職側の不安・抵抗感のほか、これらの活動を効果的に進めていくための教育訓練・研修の機会の不足に伴う問題も指摘されている(Kaslow, 2015)。講演や専門書等の伝統的な方法に留まらず、より多様な方法を用いて、心の健康に関わる知識・知見を普及するための知識・技能・態度を明らかにし、心理専門職の養成・教育訓練に反映させていく必要がある(新井, 2019)。

また、非科学的な学問として誤解されがちな心理学にとって、心理学が科学であることを社会的に示し、効果的に人々の健康や生活に寄与するためには(Kaslow, 2015)、伝達・普及する心理学的知識・知見は、実証研究を通して見出された(エビデンスに基づく)知識・知見であるということが重要となる。したがって、心理学における科学的な知識・技能・態度を基盤としながら、心の健康に寄与する知識・知見の社会的普及に関わる活動を進めることが、心理専門職に求められていると考えられる。多様な社会現場において臨床実践に携わる公認心理師等の心理専門職だからこそ、社会的普及に関わる活動に積極的に関与することで、学術研究と臨床現場をつなぎ、「心の科学の現場への応用」と「現場から発想した心の科学の育成」(日本学術会議, 2010)にも貢献し得る可能性が広がる

と考えられる。

しかし、日本の心理専門職が、これらの普及に関わる諸活動に対して実際にどのような認識や態度を有しているのか、また、社会的な普及活動に対する前向きな認識や態度を醸成するためにはどのような要因や手立てが重要となるのかを検討した研究はほとんど行われていない。これらの実態や関連要因を調査しながら、今後の心理専門職の養成・教育訓練や継続研修、サポート体制の在り方について積極的に検討する必要がある。

そこで本研究では、心の健康に関わる知識・知見の社会的普及に対する諸活動への前向きな態度を「社会的普及志向」と記述し、日本の心理専門職とそれらを目指す大学院生を対象に、これらの志向性の実態と関連要因を探索的に調査・検討することを目的とする。

上述の通り、社会的普及に関連する議論は様々に行われているものの、実際の心理専門職を対象として、その実態調査や関連要因を検討した先行研究は、十分に行われていない。そこで本研究では、次の二点を踏まえて探索的な調査計画を進めることとした。第一に、心理学的知識の普及に関して多角的に展望している Kaslow (2015) の研究を参考に、様々な対象者に多様な方法・媒体を用いて心の健康に関する知識・知見の普及を行う志向性を測定する項目を試験的に作成した。第二に、実証研究に基づく(エビデンスに基づく)知識・知見が人々に伝達・普及される必要がある、科学的な知識・技能・態度が社会的な普及活動を進める基盤として重要となるという上述の議論を踏まえ、先行研究(e.g., Aarons,

2004; Gelso et al., 2013)に基づき日本の心理専門職・大学院生の研究活動に関わる態度や教育訓練経験、EBP 態度を調査・検討した研究(新井, 2020)で使用された項目・尺度を取り上げて、これらの社会的普及志向に関連する要因を探索的に分析・検討することとした。

## II 方法

### 1. 調査対象者

心理専門職(臨床心理士資格取得済み・見込み)と、公認心理師養成大学院や臨床心理士指定大学院(修士・博士前期)の大学院生、計181名から回答を得た。データの不備等を除外し、172名を分析対象とした(有効回答率95.02%)。心理専門職102名(男性24名、女性78名、平均年齢33.80,  $SD = 8.87$ )、大学院生は、修士1年が10名、修士2年が60名、計70名(男性16名、女性54名、平均年齢25.93歳,  $SD = 6.70$ )であった。主要又は関心のある臨床領域は、大学院生・心理専門職共に医療・保健領域が多く(順に46名, 65.71%, 41名, 40.19%)、理論的志向性では、大学院生は統合・折衷派(20名, 28.57%)や行動療法・認知行動療法(19名, 27.14%)、心理専門職は統合・折衷派(43名, 42.15%)が多かった。心理専門職の臨床経験は50名(49%)が3年以下、全体の約8割が9年以下の経験を有する者であった。

### 2. 調査内容

性別、年齢、臨床経験等の基本属性・事項のほか、以下の(1)~(3)の質問項目を調査した。

## 1) 心の健康に関する知識・知見の社会的普及志向に関わる質問項目

先行研究(e.g., Kaslow, 2015)を参考に、以下の項目を作成した。(a)様々な対象者(患者・クライアント, 児童生徒・大学生, 一般の人々, 他職種, 行政・政策担当者)に, (b)多様な方法(講演会・研修会, 学校教育, 専門書・教科書, 一般図書, テレビ・ラジオ, Web・SNS, 博物館・科学館)を用いて心の健康に関する知識・知見を普及する活動について, (c)どのような志向を有しているか(①重要性(心理専門職として重要な活動だと思うか), ②経験(実際にこの活動に携わった経験はあるか), ③意欲(これらの活動を行っていききたいと思うか), ④自信(これらの活動を行う自信はあるか), ④不安(これらの活動を行うことに不安や抵抗感はあるか), ⑤教育訓練ニーズ(これらの活動を効果的に進めるための教育訓練や研修を受けてみたいと思うか))を, 全くあてはまらない(1)~よくあてはまる(5)の5件法で尋ねた。

## 2) 研究活動に関わる態度や経験および教育訓練に関する質問項目

卒業論文や修士論文以外で指導教員等の研究に関与・補助した経験を尋ねる質問(「その他の研究経験(大学院以前)」)のほか, ①②③の項目を実施した。

①研究に関する教育訓練環境尺度: 大学院(修士・博士前期課程)での研究に関わる教育訓練環境への認知を測定する尺度(新井, 2020)である。「肯定的な研究指導・サポート」「研究と臨床のつながりの学習」「研究・分析に必要な学習環境」「教員の研究活動への意欲」の4因子24項目であり, 良好な $\alpha$ 係数と共に, 4因子モデルに基づ

く構造方程式モデリングによる確認的因子分析から一定の適合度が確認されている。研究活動への興味・関心や学会発表回数等との相関分析から併存的妥当性も確認されている。本調査全体の項目量を考慮し, 各因子の因子負荷量の高い上位4項目を選択的に用い, 調査対象者には, 大学院で受けている教育・環境を振り返りながら, 全くあてはまらない(1)~よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。心理専門職には項目表現を過去形にし, 回想法にて回答を求めた。

②研究活動への興味・関心や自信, 肯定的な研究体験: 先行研究(新井, 2020)で作成・実施された項目を吟味・精選して実施した。第一に, 研究への興味・関心を尋ねるため, 「研究をすることに興味・関心がある」に, 全くあてはまらない(1)~よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。第二に, 研究の基本プロセスに関わる質問9項目(例:「研究テーマを設定し, 計画を立てること」)を使用し, 全く自信がない(1)~とても自信がある(5)の5件法で尋ねた。第三に, 研究活動を通しての成功体験等を尋ねる3項目について, 全くあてはまらない(1)~よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた(肯定的な研究経験)。

③学会への参加・発表および論文等の執筆経験: 国内外の学会への参加・発表回数, 研究成果の公表に関わる報告書や書籍, 研究論文の執筆経験(書籍や論文等の数)を尋ねた。

## 3) EBPに関わる態度および環境に関する質問項目

①臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度: 研究の知識・技能や研究知見の臨床

的有用性、基礎心理学を含む多様な研究者との交流意欲等に関わる態度を測定する尺度(新井, 2020)である。「研究知見・技能の臨床的有用性」「実証研究に基づく臨床実践への意識」「心理学分野の多様な知見や研究者への関心」の3因子26項目から構成され、良好な $\alpha$ 係数と共に、3因子モデルに基づく確認的因子分析から一定の適合度を確認されている。本調査全体の項目量を考慮して、各因子のうち因子負荷量の高い上位4項目を選択的に用い、調査回答者には、全くあてはまらない(1)～よくあてはまる(5)の5件法で回答を求めた。

② EBP 要請環境：所属する大学院や勤務先においてEBPに関わる臨床活動が重視されているかどうかを、1項目5件法(全く重視されていない～とても重視されている)で尋ねた。

### 3. 調査手続き

縁故法により協力を依頼し、同意を得た対象者にWeb調査を実施した(調査時期2018年12月～2019年1月)。本研究は著者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

## Ⅲ 結果

### 1. 心の健康に関する知識・知見の社会的普及志向に関する分散分析結果

普及対象(対応あり)と本研究の調査対象(大学院生・心理専門職：対応なし)を独立変数、社会的普及志向の各項目を従属変数とした2要因分散分析を行った結果(表1)、調査対象や普及対象の主効果のほか、重要性、経験、自信において有意な交互作用がみられた。単純主効果(5～1%水準

で有意)を確認した後、多重比較を行った結果を表1の下部に示した。大学院生・心理専門職共に、患者・クライアントを中心に、児童生徒・大学生、一般の人々、他職種等への普及に関する意欲、自信、教育訓練ニーズが高く、行政・政策担当者への普及志向は低い傾向にあること、大学院生は心理専門職より普及経験が少なく、自信が低く不安を感じており、心理専門職は大学院生より一般の人々や行政・政策担当者への普及の重要性を高く認識している傾向にあった。

次に、社会的普及の方法(対応あり)と本研究の調査対象(大学院生・心理専門職：対応なし)を独立変数、社会的普及志向の各項目を従属変数とした2要因分散分析を行った結果(表2)、調査対象や普及方法の主効果のほか、経験、意欲、自信において有意な交互作用がみられた。10～1%水準で有意または有意傾向であった単純主効果の結果を踏まえ、多重比較の結果を表2の下部に示した。大学院生・心理専門職共に、講演会・研修会、学校教育等による普及志向が高く、テレビ・ラジオやWebサイト・SNS、博物館・科学館等には不安を感じ、重要性や教育訓練ニーズが低く、専門書、一般図書等による普及志向は概ねその中間的な位置づけとして認知されている傾向が示された。心理専門職は大学院生より各種方法を用いた普及の重要性や経験、自信を高く有していたが、Webサイト・SNSに関しては、大学院生の方が意欲が高い傾向がみられた。

表1 大学院生と心理専門職における普及対象に応じた社会的普及志向の分散分析結果

	大学院生 (n = 70)										心理専門職 (n = 102)				主効果												
	患者・クラ イベント		児童生徒・ 大学生		一般の人々		他職種		行政・政策 担当者		患者・クラ イベント		児童生徒・ 大学生		一般の人々		他職種		行政・政策 担当者		調査対象		普及対象		相互作用		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	F 値 ( $\eta_p^2$ )	F 値 ( $\eta_p^2$ )	F 値 ( $\eta_p^2$ )	F 値 ( $\eta_p^2$ )	F 値 ( $\eta_p^2$ )	F 値 ( $\eta_p^2$ )	
重要性	4.69 (0.50)	4.61 (0.52)	4.57 (0.53)	4.66 (0.51)	4.27 (0.95)	4.60 (0.75)	4.57 (0.72)	4.66 (0.65)	4.73 (0.45)	4.66 (0.65)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	4.59 (0.69)	0.88 (.01)	5.16** (.11)	5.16** (.11)	5.16** (.11)	5.16** (.11)	3.44** (.08)	3.44** (.08)
経験	2.83 (1.30)	2.40 (1.33)	2.16 (1.24)	1.74 (1.19)	1.23 (0.68)	3.74 (1.15)	3.21 (1.40)	3.46 (1.41)	3.20 (1.52)	3.46 (1.41)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	1.92 (1.35)	60.09** (.26)	49.73** (.54)	49.73** (.54)	49.73** (.54)	49.73** (.54)	6.76** (.14)	6.76** (.14)
意欲	4.36 (0.68)	4.27 (0.56)	4.13 (0.78)	3.96 (0.91)	3.57 (1.06)	4.33 (0.84)	4.24 (0.79)	4.11 (0.88)	4.08 (0.91)	4.11 (0.88)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	3.40 (1.31)	0.06 (.00)	20.73** (.33)	20.73** (.33)	20.73** (.33)	20.73** (.33)	1.01 (.02)	1.01 (.02)
自信	2.77 (0.95)	2.67 (1.10)	2.56 (0.91)	2.26 (1.07)	1.79 (0.92)	3.31 (1.07)	3.21 (0.98)	3.15 (1.11)	3.06 (1.12)	3.15 (1.11)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	2.41 (1.20)	20.69** (.11)	37.91** (.48)	37.91** (.48)	37.91** (.48)	37.91** (.48)	2.46* (.06)	2.46* (.06)
不安	3.38 (1.06)	3.34 (1.03)	3.36 (1.09)	3.66 (1.23)	3.86 (1.22)	3.04 (1.16)	3.13 (1.23)	3.17 (1.18)	3.16 (1.20)	3.17 (1.18)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	3.33 (1.25)	5.23* (.03)	6.66** (.14)	6.66** (.14)	6.66** (.14)	6.66** (.14)	1.47 (.03)	1.47 (.03)
教育訓練ニーズ	4.63 (0.62)	4.59 (0.75)	4.53 (0.76)	4.53 (0.72)	4.10 (1.05)	4.45 (0.73)	4.46 (0.82)	4.47 (0.77)	4.43 (0.80)	4.47 (0.77)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	4.03 (1.20)	0.97 (.01)	10.24** (.20)	10.24** (.20)	10.24** (.20)	10.24** (.20)	0.76 (.02)	0.76 (.02)

\*\*p < .01, \*p < .05

注) 以下、多重比較の結果を示した。普及対象は、患者・クライアント(client)、児童生徒・大学生(student)、一般の人々(people)、他職種(profession)、行政・政策担当者(policy)である。

普及志向のうち、重要性は「重要」、教育訓練ニーズは「訓練」と表記した。

(重要) people・policy : 心理専門職>大学院生、大学院生 : client・student・people・profession>policy

(経験) client・student・people・profession・policy : 心理専門職>大学院生、  
大学院生 : client>people・profession・policy ; student>profession・policy, people > policy

心理専門職 : client>student・people>policy, profession > policy

(意欲) client>people・profession>policy, student > profession > policy

(自信) client・student・people・profession・policy : 心理専門職>大学院生

大学院生 : client・student・people>profession>policy, 心理専門職 : client>people>policy, student・profession>policy

(不安) policy>client・student・people, profession > client, 大学院生>心理専門職

(訓練) client・student・people・profession>policy

表2 大学院生と心理専門職における普及方法に応じた社会的普及志向の分散分析結果

	心理専門職 (n = 102)												相互作用			
	大学院生 (n = 70)						主効果									
	講演会・ 研究会	学校教育 教科書	専門書・ 教科書	一般図書 ラジオ	Web・ SNS	博物館・ 科学館	講演会・ 研究会	学校教育 教科書	専門書・ 教科書	一般図書 ラジオ	Web・ SNS	博物館・ 科学館		調査対象 普及方法		
M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	F値 ( $\eta_p^2$ )	F値 ( $\eta_p^2$ )			
重要性	4.44 (0.69)	4.59 (0.73)	4.19 (0.97)	4.10 (1.01)	3.86 (1.13)	3.24 (1.18)	4.70 (0.48)	4.67 (0.65)	4.56 (0.64)	4.40 (0.80)	3.83 (1.04)	3.54 (1.23)	3.25† (.02)	45.80** (.63)	1.80 (.06)	
結論	1.71 (1.23)	1.79 (1.14)	1.24 (0.73)	1.13 (0.54)	1.14 (0.62)	1.16 (0.58)	2.96 (1.62)	2.80 (1.57)	2.00 (1.44)	1.63 (1.13)	1.20 (0.65)	1.40 (0.97)	1.13 (0.52)	30.88** (.15)	7.39** (.21)	
意欲	3.61 (1.09)	4.13 (0.98)	3.14 (1.23)	3.07 (1.23)	2.31 (1.22)	2.43 (1.08)	3.77 (1.16)	3.92 (1.06)	3.30 (1.30)	3.25 (1.29)	2.15 (1.16)	2.47 (1.26)	0.05 (.00)	70.26** (.72)	2.86* (.09)	
自信	2.00 (1.02)	2.43 (1.10)	1.89 (1.08)	1.99 (1.00)	1.53 (0.74)	1.75 (0.94)	2.83 (1.23)	2.88 (1.08)	2.28 (1.17)	2.33 (1.19)	1.70 (0.89)	2.01 (1.10)	2.03 (1.06)	7.94** (.05)	34.92** (.56)	3.35** (.11)
不安	3.36 (1.34)	3.39 (1.24)	3.49 (1.26)	3.67 (1.10)	3.97 (1.10)	3.48 (1.15)	3.16 (1.25)	3.19 (1.14)	3.24 (1.23)	3.48 (1.23)	4.14 (1.13)	3.88 (1.10)	0.70 (.00)	17.09** (.39)	1.37 (.05)	
教育訓練ニーズ	4.24 (0.98)	4.49 (0.99)	3.70 (1.24)	3.56 (1.24)	3.01 (1.41)	3.04 (1.24)	4.24 (1.14)	4.46 (0.89)	3.59 (1.32)	3.56 (1.35)	2.84 (1.46)	3.10 (1.40)	0.31 (.00)	45.94** (.63)	0.42 (.02)	

\* $p < .01$ , † $p < .10$

注) 以下、多重比較の結果を示した。普及方法は、講演会・研究会(lecture), 学校教育(school), 専門書・教科書(academic), 一般図書(book), テレビ・ラジオ(television), Web・SNS(website), 博物館・科学館(museum)である。普及志向のうち、重要性は「重要」, 教育訓練ニーズは「訓練」と表記した。

〈重要〉心理専門職>大学院生, lecture>school>academic・book>television>website・museum  
 〈経験〉lecture・school・academic・book:心理専門職>大学院生

大学院生: lecture>book>television・museum, school>book・television・website・museum  
 心理専門職: lecture・school>academic>book>television・museum, lecture・school>academic>website>museum

〈意欲〉心理専門職: lecture・school>academic・book・website>television・museum,

心理専門職: lecture・school>academic・book>museum・website>television

website:大学院生>心理専門職

〈自信〉lecture・school・academic・book・museum:心理専門職>大学院生

大学院生: school>lecture・academic・book・website>television, school>museum,

心理専門職: lecture・school>book>website・museum>television, lecture・school>academic>television

〈不安〉website>academic・lecture・school・museum, television>book>school・lecture

〈訓練〉school>lecture>academic・book>website>television, school>lecture>academic・book>museum

## 2. 心の健康に関する知識・知見の社会的普及志向と関連する諸要因の検討

まず、様々な対象者に対する多様な方法を用いた社会的普及志向について、重要性・経験・意欲・自信・不安・教育訓練ニーズの平均値を算出した。次に、本調査で使用した各変数の記述統計量や変数間の相関分析結果を大学院生・心理専門職ごとに算出した後(表3)、大学院生と心理専門職のデータに基づく多母集団同時分析を行った。具体的には、先行研究(e.g., 新井, 2020; Kahn & Schlosser, 2014; Kahn & Scott, 1997)を参考に、大学院での研究に関わる教育訓練環境や研究経験が、研究活動への興味・関心や自信、臨床実践に関わるエビデンスへの態度と関連し、それらの科学的な態度や研究環境・経験を基盤として最終的に社会的普及志向に影響を及ぼすモデルを仮定して検討を行った。

適合度の高いモデルを探索した結果、研究に関する教育訓練環境尺度、その他の研究経験(大学院以前)、肯定的な研究体験、EBP 要請環境を外生変数に設定しつつ、国内または海外での学会における参加・発表回数や研究論文の執筆経験を含めないモデルにおいて、概ね良好な適合度(GFI = .91, AGFI = .80, CFI = .99, RMSEA = .02)が確認された(図1)。なお、大学院生・心理専門職共に有意ではないパスがモデルに一部含まれているが、効果量としての回帰係数の経験的基準として、.10程度が弱い関連、.30程度が中程度の関連、.50程度が強い関連を示すことを考慮し(Cohen, 1988)、.15前後の関連がみられるパスをモデルに含めつつ、全体としての適合度が良好であるモデルを探索した結果、最終的に

図1が見出された。

社会的普及志向の各種変数への影響に着目すると、大学院生では、研究と臨床のつながりの学習、研究・分析に必要な学習環境、教員の研究活動への意欲、研究活動における自信、研究知見・技能の臨床的有用性、心理学分野の多様な知見や研究者への関心等が、いくつかの社会的普及志向に正の関連を示した。研究活動への興味・関心や自信は臨床実践に関するエビデンスへの態度を媒介として間接的に社会的普及志向に影響を及ぼしていた。一方、心理専門職では、研究活動への自信や心理学分野の多様な知見や研究者への関心を中心に社会的普及志向と有意な関連が多くみられた点が特徴的であり、その他、研究と臨床のつながりの学習、その他の研究経験(大学院以前)、研究知見・技能の臨床的有用性、実証研究に基づく臨床実践への意識等において社会的普及志向との関連が示された(有意または有意傾向)。なお、.15前後の標準化係数ではあるものの、研究活動における自信および心理学分野の多様な知見や研究者への関心(大学院生)、教員の研究活動への意欲(心理専門職)において、社会的普及志向(重要性、自信、不安、または教育訓練ニーズ)への否定的な関連もみられた。

## IV 考察

分散分析結果(表1, 2)より、大学院生・心理専門職共に、日々の臨床実践で関わる機会が多く、援助対象ともなり得る対象者(クライアントや児童生徒、他職種など)や、心理学的知識の伝達・普及の場として従来より実践されてきた方法(講演会・研修会や学校教育など)に対しては、

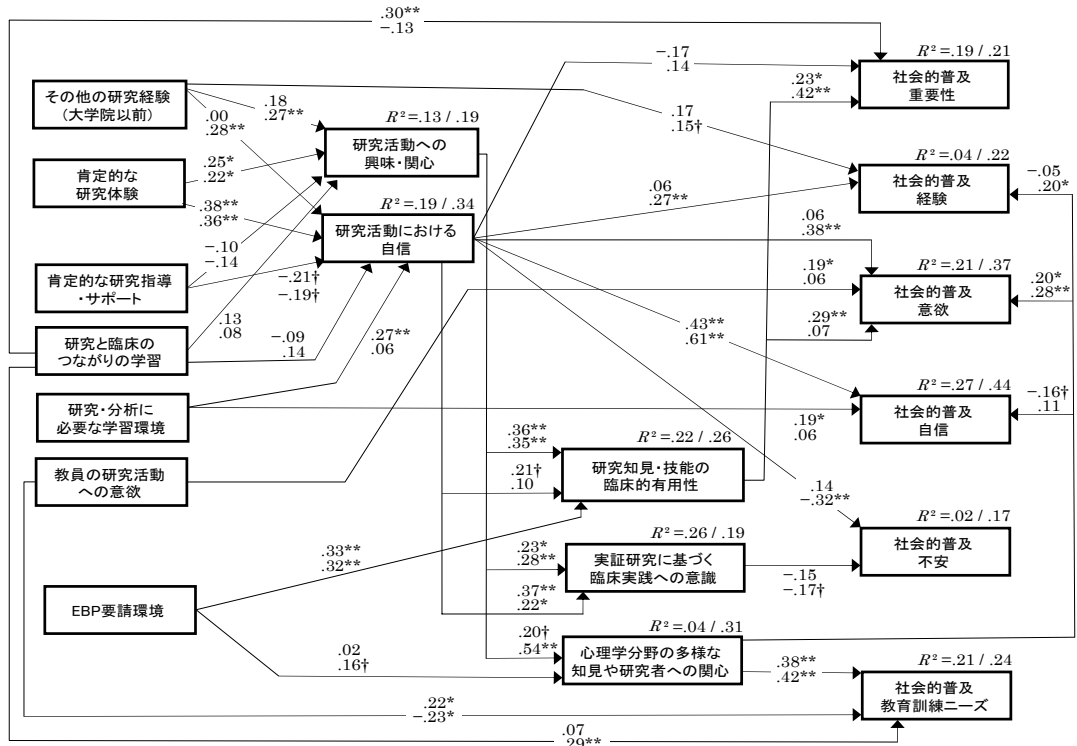


表3 記述統計量および相関分析の結果

	大学院生																					心理専門職			
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	(21)	M	SD	M	SD
(1)研究活動への興味・関心	—	.38**	.03	.19	-.03	.04	.29*	.24*	.31**	.15	.15	.34**	.38**	.21	.18	.07	.06	.23	.03	.02	.14	3.71	1.13	3.82	1.21
(2)研究活動における自信	.54**	—	.00	.04	.20	.16	.35**	.05	.17	-.04	.06	-.02	.44**	.02	-.18	-.06	.06	.03	.46**	.07	-.03	2.61	0.69	2.92	0.78
研究に関する教育訓練環境尺度																									
(3)肯定的な研究指導・サポート	.02	.11	—	.28*	.41**	.30*	.33**	.09	.23	.02	-.03	.49**	.19	.09	.22	.23	-.17	.27*	.05	-.15	.27*	4.16	0.81	4.01	0.99
(4)研究と臨床のつながりの学習	.20*	.34**	.62**	—	.33**	.47**	.27*	.13	.29*	.13	.08	.43**	.20	.07	.22	.39**	.20	.34**	.11	-.16	.26*	3.89	0.75	3.93	0.93
(5)研究・分析に必要な学習環境	.02	.17	.64**	.55**	—	.47**	.21	.02	.12	-.07	-.24*	.18	.12	.10	.27*	.07	.07	.15	.29*	-.09	.18	3.36	0.85	3.63	0.94
(6)教員の研究活動への意欲	.13	.20*	.57**	.63**	.59**	—	.16	.10	.27*	.05	.14	.25*	.12	.13	.19	.24*	.13	.35**	.23	-.03	.32**	3.42	0.77	3.62	0.94
(7)肯定的な研究体験	.32**	.49**	.37**	.49**	.37**	.39**	—	.19	.13	.00	-.12	.37**	.20	.14	.04	.06	-.02	.22	.29*	.02	.15	3.51	0.91	3.84	0.80
(8)その他の研究経験(大学院以前)	.37**	.45**	.11	.35**	.12	.35**	.39**	—	.48**	.34**	.44**	.17	.27*	.15	-.05	-.02	.23	.06	.04	.13	.00	0.53	0.74	1.12	1.17
(9)国内学会への参加・発表回数	.33**	.32**	.00	.07	.13	.17	.2*	.47**	—	.32**	.44**	.38**	.32**	.30*	.13	.08	.09	.17	-.09	.04	.14	3.00	2.46	17.49	23.71
(10)海外学会への参加・発表回数	.18	.34**	-.10	.04	.11	.05	.12	.25*	.43**	—	.11	.12	-.01	-.07	-.26*	-.17	.07	-.28*	-.10	-.01	-.26*	.007	0.31	0.88	3.40
(11)研究論文の執筆経験	.30**	.37**	.09	.16	.16	.09	.20*	.45**	.61**	.37**	—	.16	.19	.25*	.17	.11	.09	.17	-.11	.02	-.01	0.74	1.02	4.06	9.37
臨床実践に関するエビデンスへの態度尺度																									
(12)研究知見・技能の臨床的有用性	.39**	.28**	.28**	.41**	.26**	.35**	.42**	.35**	.23*	.06	.23*	—	.30*	.30*	.36**	.36**	.04	.46**	-.09	-.06	.32**	4.48	0.43	4.51	0.53
(13)実証研究に基づく臨床実践への意識	.39**	.37**	.15	.18	.15	.19	.35**	.28**	.38**	.15	.34**	.35**	—	.34**	.16	-.03	.09	.15	.12	-.07	.17	2.87	0.80	3.08	0.83
(14)心理学分野の多様な知見や研究者への関心	.53**	.29**	.26**	.30**	.26**	.24*	.28**	.30**	.20*	.14	.23*	.62**	.40**	—	.07	.09	-.03	.30*	-.18	.07	.41**	4.26	0.53	4.24	0.68
(15)EBP要請環境	-.03	-.03	.26**	.25*	.30**	.28**	.06	-.14	-.08	-.11	-.18	.33**	.11	.17	—	.16	.06	.25*	.14	-.10	.10	3.76	0.86	3.51	1.12
社会的普及志向																									
(16)重要性	.22*	.22*	.03	.10	.14	.15	.11	.09	.05	.12	-.02	.42**	.17	.31**	-.01	—	-.03	.53**	.10	-.08	.40**	4.23	0.52	4.37	0.49
(17)経験	.34**	.39**	-.03	.10	.11	.18	.18	.37**	.38**	.14	.41**	.25*	.20*	.33**	.04	.17	—	.15	.32**	-.01	.04	1.64	0.57	2.39	0.67
(18)意欲	.47**	.49**	.16	.29**	.23*	.31**	.27**	.34**	.19	.17	.15	.40**	.31**	.48**	.11	.60**	.47**	—	.17	-.06	.77**	3.49	0.63	3.47	0.73
(19)自信	.43**	.65**	.03	.21*	.23*	.22*	.35**	.40**	.36**	.30**	.31**	.31**	.28*	.32**	.01	.34**	.60**	.69**	—	-.35**	-.02	2.13	0.71	2.60	0.83
(20)不安	-.22*	-.38**	-.06	-.11	-.20*	-.11	-.18	-.12	-.27**	-.34**	-.09	-.12	-.30**	-.22*	-.07	-.23*	-.26**	-.43**	-.53**	—	.07	3.56	0.82	3.35	0.89
(21)教育訓練ニーズ	.30**	.18	.15	.26**	.10	.08	.11	.06	-.05	.05	.16	.29**	.17	.47**	.10	.44**	.30**	.61**	.26**	-.13	—	3.98	0.71	3.89	0.81

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

注) 相関分析では、上三角行列には大学院生、下三角行列には心理専門職のデータに基づく相関係数を示した。



注1) \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ ,  $R^2$ は決定係数を表す。  
 注2) 図の煩雑さを避けるため、誤差項・共分散、および外生変数間の相関は省略した。  
 注3) 標準化係数の値は、上段が大学院生で下段が心理専門職であり、 $R^2$ は左が大学院生、右が心理専門職の値である。

図1 社会的普及志向に影響を及ぼす要因に関する多母集団同時分析(大学院生と心理専門職)

全体的に前向きな普及志向を有していた一方、臨床経験や教育訓練経験の少ない大学院生が、様々な対象者や各種の方法を用いた普及に関して、心理専門職と比べて自信が低く不安を感じる傾向にあったことなどは、現実の実態を反映した、ごく自然な結果と考えられる。心理学の科学的な知見に基づき、日々の生活での思考や問題解決、多様な他者との関係構築等について学校教育の文脈の中で児童生徒に教えたり、患者・クライアントへの伝達・普及も、精神疾患の症状理解や予防、治療法の選択における意思決定、精神疾患を巡るスティグマの低減等において重要となる(Kaslow,

2015)。このように、臨床実践にも直接的・間接的に関連し、心理専門職あるいは大学院生が、比較的抵抗感なく関与することのできる対象者や方法・媒体を用いた心の健康に関わる知識・知見の社会的普及を促進する教育訓練・研修やサポート体制のさらなる充実が求められると考えられる。

一方、行政・政策担当者に対して、心理専門職の役割や心理専門職が有する知識・知見を伝えることも重要とされているが(Sommer, 2006)、本研究では心理専門職・大学院生共に、普及活動への経験や自信は低く、不安を感じている傾向にあった。一般的に、行政・政策担当者は人々の生活や

社会問題に関わる施策・制度を実施し、様々な専門家による諸活動の財政的・公的な基盤にも影響を及ぼす立場と考えられることから、人々や社会に及ぼす影響の大きさを考慮して、より慎重な姿勢を有しているのかもしれない。しかし、大学院生に比べて心理専門職の方が普及の重要性を高く認知していた。社会の諸領域での臨床経験を豊富に有する心理専門職だからこそ、人々の心の健康の保持増進のため、社会制度に携わる行政・政策担当者への普及の必要性を感じている可能性がある。これらの具体的な実践方法、実践例(e.g., Shonkoff & Bales, 2011)を学ぶ教育訓練や研修機会の充実を図るなどして、重要性認知のみならず、普及への意欲や自信の向上等につなげる必要がある。

Webサイト・SNSの活用に関しては、大学院生の方が心理専門職よりも意欲は高い傾向が示され、年齢の若い心理学専門家ほどTwitterアカウントを保有している傾向にあることを示した研究(Weinstein & Sumeracki, 2017)と類似した傾向がみられた。そして、テレビ・ラジオ、Webサイト・SNS、博物館・科学館の普及志向は、心理専門職・大学院生共に他の方法に比べて概ね低い傾向にあった。しかし、近年の心理学専門家には、伝統的に行われてきたテレビ・ラジオのほか、Twitter, Facebook, Instagram, YouTube等のソーシャルメディアの活用も広まっており(Wedding, 2017)、心理支援においても、相談室での心理面接等のような伝統的な方法に留まらず、様々な状態やニーズをもつ人々にとってアクセスしやすく、多様なツール(例：スマートフォンやタブレット、ソーシャル

メディア等のオンライン・ツール)を用いた心理支援サービスの提供が求められている(Kazdin & Rabbitt, 2013)。博物館・科学館も、心理学の歴史や知識を広く共有することのできる重要な場として、諸外国のほか日本国内でも取り組みが行われている(楠見, 2013)。テレビ・ラジオ、Webサイト・SNS、博物館・科学館を活用した心の健康に関わる心理学的知識の普及に関して、日本の心理専門職がどのように関与し、効果的に実践できるのか、今後のさらなる研究・調査が求められる。

また、多母集団同時分析の結果、大学院生では研究活動への興味・関心や自信が臨床実践におけるエビデンスへの態度を媒介として、間接的に社会的普及志向に肯定的な影響を及ぼしていると共に、研究に関わる知識・技能・態度を育成する大学院教育経験(研究と臨床のつながりの学習のほか、研究・分析に必要な学習環境、教員の研究活動への意欲、その他の研究経験など)も部分的に社会的普及志向との正の関連がみられた。これらの結果から、臨床実践に携わることを目標として心理専門職を目指す大学院生に対しても、心の健康に関する知識・知見の社会的普及への態度を育成するための基盤として、研究活動に関わる充実した教育訓練環境を提供しながら、研究活動への関心や自信を高め(Gelso et al., 2013)、エビデンスに基づく臨床実践への態度を養うこと(Kahn & Schlosser, 2014)の必要性が示唆された。研究知見・技能が臨床実践を効果的に進めるためにいかに有用であるかを学び、身につけることは、心の健康に関する知識・知見を広く社会に普及する活動への前向きな意識を高めることにも寄与

する可能性がある。

一方で、特に大学院生では、部分的にはあるものの、社会的普及志向と否定的な関連を示した説明変数もいくつかみられた(研究活動における自信、心理学分野の多様な知見や研究者への関心)。研究活動への自信を身につけ、より専門的な学術研究に傾倒するほど、広く一般社会に向けた知識・知見の普及には関心が向きにくくなったり、学術研究知見の重要性や難しさ、幅広さを強く自覚するほど、社会的普及に対する不安も同時に高まるといった側面が大学院生には生じているかもしれない。

心理専門職では、研究活動における自信において複数の社会的普及志向との肯定的な関連が顕著に示された。心理学的知識が誤解されて広まることなどへの不安・抵抗感が生じる場合もあることを踏まえると(Kaslow, 2015)、特に心理専門職にとっては、社会の多様な人々に及ぼす影響を想像し、より確かな知識・知見を適切に普及していくための基盤として、研究に関わる知識・技能への自信が必要とされているのかもしれない。さらに、心理学分野の多様な知見や研究者への関心等のエビデンスに基づく臨床実践への態度が、複数の社会的普及志向と正の関連がみられた点も特徴的であった。心理専門職にとって、臨床心理学に留まらず、多様な心理学分野の研究知見や研究者に対して親和的で開かれた態度を持つことは、エビデンスに基づく臨床実践において重要となるばかりでなく(丹野, 2005)、社会の多様な人々の心の健康につながる知識・知見に触れやすくなること等を通して、それらを普及する活動への志向性につながりやすくなるのかもしれない。

実際に、心理学は従来の枠組みを越えて多種多様な専門・研究・応用領域を有する学問体系として発展し続けており(日本学術会議, 2010)、心理専門職の養成では、これらの多様な専門・研究・応用領域の差異を認め、尊重する態度の育成が求められている(Silbereisen & Ritchie, 2014)。これらの教育訓練の充実や文化の醸成は、心の健康に関する知識・知見の普及志向を促す試みとしても、重要となり得る可能性がある。

以上、日本の心理専門職・大学院生における心の健康に関わる知識・知見の社会的普及志向の実態や関連要因が示された。部分的にはあるものの、研究に関わる知識・技能・態度を育成する大学院教育経験、心の健康に関する多様な知識や知見を生み出すための研究活動そのものへの興味・関心や自信、EBPへの態度を促すことが、より多様な観点から前向きな社会的普及志向を醸成し得る可能性が示された点は注目に値する結果と考えられる。本研究の知見を基礎資料とし、さらなる研究を積み重ねながら、社会的普及志向を醸成するための手立てや心理専門職の養成・教育訓練の在り方と共に、心の健康に関わる社会的普及の効果的な実践方法についても詳細に検討を進める必要がある。

最後に、本研究の限界と今後の課題として、4つ指摘する。第一に、本研究の結果は、縁故法を用いた、やや小規模の調査データに基づくものであり、心理専門職も約8割が臨床経験9年以下の比較的若い者に留まる。今後は、より広範囲の対象者に基づく調査・検討が必要である。第二に、社会的普及志向の項目は本研究で試験的に作成されたものであり、かつ、各対象や各

方法による普及志向の指標として暫定的に算出し分析に活用したため、結果の慎重な解釈と、十分な信頼性・妥当性のある尺度の開発が課題である。第三に、本研究は一時点での探索的な横断的調査に留まるため、研究活動やEBPに関わる知識・技能・態度およびそれらの教育訓練経験が、心の健康に関わる社会的普及志向と具体的にどのように関連し、どのようなプロセスやメカニズムを経て普及志向を醸成し得る可能性があるのか、縦断的調査や質的調査研究、効果研究なども含めて、より多角的かつ詳細に検討することが必要である。第四に、心理専門職がどのような心理学的知識を、誰を対象に、どのような方法で普及することが望ましいのか、その効果や有効性の測定など、より実地的な検討も必要である。その際は、心理専門職による知識・知見の一方向的な伝達・普及ではなく、対象の人々が有する経験や実践知との対話や相互作用を通して、相互の知識・経験を融合させながら(楠見, 2013)、心の健康の保持増進につなげる取り組みが重要と考えられる。

## V 引用文献

- Aarons, G. A. (2004). Mental health provider attitudes toward adoption of evidence based practice: The Evidence Based Practice Attitude Scale (EBPAS). *Mental Health Services Research*, **6**, 61-74.
- APA Presidential Task Force on Evidence-Based Practice (2006). Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist*, **61**, 271-285.
- 新井 雅 (2019). 心理専門職による研究知見の効果的生成・臨床的活用・社会的普及に関する展望. *心理臨床学研究*, **36**, 657-667.
- 新井 雅 (2020). 心理専門職・大学院生の研究活動とエビデンスに基づく実践に関わる要因の検討. *心理臨床学研究*, **37**, 559-570.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Gelso, C. J., Baumann, E. C., Chui, H. T., & Savelle, A. E. (2013). The making of a scientist-psychotherapist: The research training environment and the psychotherapist. *Psychotherapy*, **50**, 139-149.
- Kahn, J. H., & Schlosser, L. Z. (2014). Research training in professional psychology. In W. B. Johnson & N. J. Kaslow (Eds.), *The Oxford handbook of education and training in professional psychology*. New York: Oxford University Press. pp. 185-200.
- Kahn, J. H., & Scott, N. A. (1997). Predictors of research productivity and science-related career goals among counseling psychology doctoral students. *The Counseling Psychologist*, **25**, 38-67.
- Kaslow, N. J. (2015). Translating psychological science to the public. *American Psychologist*, **70**, 361-371.
- Kazdin, A. E. & Rabbitt, S. M. (2013). Novel models for delivering mental health services and reducing the burdens of

- mental illness. *Clinical Psychological Science*, **1**, 170-191.
- 楠見 孝 (2013). 心理学とサイエンスコミュニケーション. サイエンスコミュニケーション: 日本サイエンスコミュニケーション協会誌, **2**, 66-71.
- 日本学術会議 (2010). 心理学分野の展望—人間社会の持続的発展にこたえる心の科学の探求. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h-1-3.pdf> (2017年6月5日取得)
- Shonkoff, J. P. & Bales, S. N. (2011). Science does not speak for itself: translating child development research for the public and its policymakers. *Child Development*, **82**, 17-32.
- Silbereisen, R. K. & Ritchie, P. L. J. (2014). Introduction to psychology education and training: A global perspective. In R. K. Silbereisen, P. L. J. Ritchie, & J. Pandey (Eds.). *Psychology education and training: A global perspective*. Hove: Psychology Press. pp. 3-17.
- Sommer, R. (2006). Dual dissemination: Writing for colleagues and the public. *American Psychologist*, **61**, 955-958.
- 丹野義彦 (2005). 基礎心理学と臨床心理学の対話はどのように可能か. 基礎心理学研究, **24**, 47-54.
- Wedding, D. (2017). Public education and media relations in psychology. *American Psychologist*, **72**, 764-777.
- Weinstein, Y. & Sumeracki, M. A. (2017). Are twitter and blogs important tools for the modern psychological scientist? *Perspectives on Psychological Science*, **12**, 1171-1175.

#### 付記

本調査に快くご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JP16K17343の助成を受けて行われました。